
職業階層と現代中国人の死生観

李萍

中国人民大学教授

「職業階層」とは各種職業間の分類を指す。様々な基準によって、種々の職業を区別することができる。たとえば、社会的地位を基準とすれば「高級職業」と「低級職業」に区分でき、労働の複雑さの程度を基準とすれば「単一職業」と「複合職業」とに区分できる。本稿では伝統文化と社会的慣例に基づき、中国社会の職業階層を幹部、知識人、職員、労働者、農民の五つに大別し、これら五つの職業階層に依拠して現代中国人の死生観を検討する。

一

一般的に言うところ、職業階層は二つの動きに由来する。第一の動きとは労働的分業という内的な動きである。労働内容の専門化と専門化にともない、もとは一つであった職業から多くの職業が分化した。第二の動きとは

社会的分業という外的な動きである。経済活動の増大と社会生活の多様化がこうじた結果、これと呼応してさらに多くの職業が誕生した。したがって、農業中心の時代であればあるほど職業階層は発達せず、これとは逆に、工業化が進めば進むほど職業階層は進展する。中国はまさに農業中心の時代から工業中心の時代へと変化を遂げている過程にあり、これと同時に各種の職業階層の形式が存在し、しかも新しい職業階層の中に古い職業階層が混在している。

中国古代の職業階層はおよそ士・農・工・商の四つに分類できる。しかしここで指摘すべきなのは、士農工商は一種の職業分類であるのみならず、身分差別も内包していることである。士農工商がそれぞれ獲得した社会的資源、社会的地位、道徳的評価などはまったく異なっていた。昔の中国人は現実を重視しており、現実の事績で人生の意義を明らかにし、「不朽」の概念を提示して今生と死後の世界を関連付けた。その「不朽」のもとは徳（品性）、言（著作）、身（生存）である。その中で立徳が最高位にあり、立身の位置づけが最も低い。それゆえ士農工商という職業集団は、死後に世の中に残した精神的な財産の多寡を理由として、彼らの死の価値も大きく異なることになる。たとえば「士者」は立徳、立言、立身のすべてを達成でき最も高い評価を受ける。これに次いで「農人」は立徳と立身を遂行することができるが、職人と商人は立身しかできない。彼らの価値と社会的身分もこの順にしたがって減少し低下していくのである。

新中国成立後、社会主義体制でも依然として職業に区別が存在し続けたが、これは社会的分業と労働的分業にすぎないとみなされた。労働の内容に違いがあっても、働く者は一律平等なのである。平等主義の求めに応じて、職業階層に内包される身分的差異を極力なくすように努められた。そのために主に法律と政治を通して、多数の労働者と農民こそが主人公であると周知させ、彼らに主体意識を植え付ける方法がとられた。しかし実際の社会管理においては、都市と農村を分けて治める方式が採用され、また「単位」という部門別に社会の構



李萍氏

成員をコントロールする手段がとられたため、労働者と農民、単位に属する人と属さない人、大きい単位に属する人と小さい単位に属する人の相違は単に職業階層だけにとどまらず、社会階層の違いにまで進展した。その結果、幹部（社会と各種組織の管理者）、都市生活者（知識人、労働者と一部の商人）、農村生活者（農民と一部の自営業者と職人）という三つの基本的な職業グループに分化した。これらの職業グループは特定の政治的意味合いを付与され、さらに身分化される傾向があらわれた。職業に内包される社会的地位と社会的権力などの内容ばかりがクローズアップされ、職業に存在する義務・職責・専門性などは軽視された。幹部と大多数の都市生活者は「公人」とみなされ、農村生活者は「私民」にすぎないとされた。彼らの死後の処遇にさえも違いがあらわれ、幹部や都市生活者は公墓に入れるが、農村生活者は個人の墓や先祖の墓に入るしかなかったのである。社会的待遇と生活環境におけるこれらの差異は、三つの職業グループの死に対する考え方に多大な

影響を与えた。

一九八〇年代以後、中国は再び経済発展を始め、都市文明を中心とした近代化のプロセスを歩みだした。経済発展を主眼に据えた近代化のプロセスの中で、職業階層もますます多様化する様相を呈し、職業階層に連動する社会階層の分化も日に日に明らかとなった。しかし単位の制度がまだ放棄されず、また都市と農村の二元対立も解消されていないため、経済発展によって再構成された職業階層に食い違いをもたらし、職業階層は現実社会の生活状況を十分に反映できないでいる。行政の影響力と経済発展のせめぎ合いの中で、中国の現在における主要な職業階層は、幹部（社

会管理者と企業管理者)、知識人(各分野の専門技術者、たとえば医師・教師・エンジニアなど)、職員(商業、企業、政府部門の一般従業者)、労働者(工業の分野や都市における肉体労働者)、農民(農村生活者)に分類することができる。

二一

人類の自我意識の誕生に関する指標の一つは、生死に対する関心である。人類が創出した文化は、複数の角度から生死にいかに対処するかという問題を理解しようと努めてきた。それゆえ、人類がこれまでに創り出した各種の文化類型はすべて各自の死生観を生み出している。中国のように生を強調したり、インドのように死を重視したり、日本のように生にも死にも重きを置いたり、民族によつて違いがある。ある意味から言うと、死生観は一つの民族文化の基本的な傾向を反映しているのである。

人類とその文化類型が有する死生観においては、各人のリアルな生死体験が無数に下敷きとなっている。一人ひとりが皆一生の中で、生の喜びと死の苦しみを実感する機会を持つている。ある人は生死に直面して困惑し、ある人は深い心理体験をし、またある人はその中から生と死の神秘を洞察する。なぜ自分と毎日いっしょに暮らしている身内の者が突然この世を去るのか？ 死とは何なのか？ 死後の復活はありうるのか？ 我々が死者に会いたいと思つたら、どのようにしてコミュニケーションをとれるのか？ 早期の人類は多くの推測をした。たとえば、野草が枯れてまた萌え出るように、人の死も暫定的なものにすぎないとされたり、春夏秋冬の移り変わりのように、死は必然の事象であるとされたり、人は大地にはぐくまれ、また大地に帰るので、死後は亡骸を土葬するのが最も自然だと考えられたりした。

生に対する非常に強い愛着により、中国人は一般的に死を最も悲しむべきこととして認識している。中国における多くのタブーは、死の話題を避けることと関係がある。それゆえ今日の中国においてもなお、死に関する話題では、「死亡」というたった二文字でさえも徹底して避けようとするのである。中国人はなぜ死を忌み嫌うのであるのか？ 専門家の学説と筆者の思考を総合して勘案すると、原因はおよそ次のようにまとめられる。第一の原因は、死とは何を意味するかがわからず、この無知により恐れおののいている点である。そして注目すべきは、死の本質と過程に対する徹底的な探究を投げ出すことが、多くの中国人にとつて、かえって「明智」であり「理性」にかなった態度だとされていることである。このような態度は、聖人の孔子が死に対する興味と死者への崇敬について弟子から問われた際に、「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん」と答えたことに由来する。孔子は死の問題を棚上げにし、いかなる死に関する思索に対しても満足はいく説明をしなかった。死後の世界に比べて、孔子は現実世界に強い関心を寄せた。この態度は明らかに合理的であるが、孔子が死に対する問題提起を極端に退けたことにより、後世の人が死の問題について深い思索をめぐらす道をふさいでしまったのである。第二の原因は、現実に対する愛着である。中国人の大部分は生を謳歌することを望んでいる。「立派に死ぬよりも、つらくても生きていたほうがまだ」という言葉は、一般人の生死の選択をあからさまに示している。ソクラテスになるか、それとも豚になるかという選択を迫られても、中国人はその選択にとらわれず例外なく一人の人となることを選ぶであろう。不遇なソクラテスにも甘んぜず、満ち足りた豚にもならないのである。何がなんでも生きていたいという願望がすべてに優先している。第三の原因は、「私情」という角度から死を理解している点である。すなわち死とは一人の人間が逝去するということだけにどまらず、ある人の夫（あるいは兄弟、父親、息子など）が逝去することでもあり、死はきわめて個人的かつ個別的现象象と化し、死の社会的意義には関心を持たない。それゆえ一般の中国人は、縁もゆかりもない見知らぬ人

の死に対して身を切られるような悲しみを覚えることは少なく、死から人類という大生命の意義を体験するすべを持たないのである。

中国人の死生観の顕著な特徴をさらに指摘すると、中国人は生死の問題を独立して取り上げず、死生観を人生観の一部分とみなし、人生観に従属するものと捉えている。中国人は人生観によって死生観が決まると信じている。これと同様に、ある人が在世中になしたことは、その人の死後に対する評価にまで影響を及ぼす。たとえば民族的な英雄という評価を受けた場合、生前に無実の罪を着せられても、死後は丁重に供養をしてもらえる。これとは逆に、民族の恥というレッテルを貼られると、死後は永遠に無恥で下劣な人物とみなされるのである。言い換えると、人はたとえ死んでもその罪と責任から逃れられず、死者に対しても罪に問い懲罰を加えねばならず、自殺したとしても罪は許されないと中国人は考えているのである。たとえば、杭州西湖のほとりにある岳飛廟の中には、秦檜夫妻が跪いている石像があり、岳飛廟に参拝する中国人の多くは廟で準備した鞭で石像をたたいたものであった。死者に対しても罪に問い懲罰を加えるという死生観は、中国人の中にこれほどまで広く深く根付き、歴史的な事件に関する認識にも影響が及んでいるのである。

新中国成立後、死生観にも重大な変化が生じた。これはまったく斬新な社会的価値観が流入したためである。政府は恐れを知らぬ革命的英雄主義を提唱し、主に「死を視ること帰するが如し」や「無私奉獻」などが宣揚され、多くの人々、特に軍人や若い学生らが強く共鳴した。死を恐れたり、死にたじろぐことは人格的な欠陥とされ、皆から批判された。また一方で、政府は各方面の力を借りて集団主義の観念を推し進め、個人（個人の生命、価値、尊厳などを含む）はすべて、全国各地にある様々な形態の集団の中に配置された。集団主義と各種の社会運動にも有効な働きがあり、一般の中国人（特に多くの農村や都市にいた無職者、主婦、宗教者）に思想的な意識変革がもたらされ、彼らが封建時代のタコツボ式の小農意識から次第に脱却し、社会性と集団

性を身につけたことは否めない。生死の問題も集団主義の力によって時代的な意義が付与され、壮大で叙事的な集団の背景の下にすっかり位置づけられた。たとえば毛沢東は「人に固より一死有り、あるいは泰山より重く、あるいは鴻毛より軽し」と述べ、死を良いか悪いか、有意義か無意味かに二分した。彼の本意は、人々に自分自身を成長させ、力を十分に発揮できるように努めさせ、集団の利益のために献身してもらいたいということにあり、そのような人生を「泰山より重い」と表現したのである。しかし一般人の日常的な死という事実は捨象されてしまった。

中国の改革開放において、旧来の観念を放棄し覆すことが重要な推進力となったが、これにより世俗化、生活化、甚だしくは物質化が崇高化、理想化、禁欲主義に取って代わった。死生観においても重大な変化が生じ、「他人のために死ぬこと」や「国家のために死ぬこと」に疑いの目が向けられるようになった。しかし、これは中央政府主導のトップダウン式の改革であるため、中央政府は依然として思想意識の動向に対し嚴重に目を光らせており、新たな生活様式にともなう民間の自発的な力はそれ相応の発展を遂げることはできず、生活観念の自律的な展開も民間組織の自己改善メカニズムも見られなかった。これにともなう死生観の状況について具体的に見ると、次のとおりである。中央政府と地方政府が勇敢で献身的な英雄を称揚し社会を「正しい」死生観に導こうとする一方で、実際の生活の中では、死ぬほどの苦境を見ても救いの手を差し伸べず、人命を軽んずる事例が多くあらわれ、日に日に生命の尊厳は低下し、死を受け入れる力も損なわれるようになった。その結果、政府が提唱する死生観と民間の死生観の間には非常に大きなギャップが生じ、これが現代の中国人の精神面における苦境となっている。政府がコントロールし宣伝している死生観は、すでに人々の実生活からはるかに遊離してしまった。人々が体感している生死の問題も、時代の要請にかなった合理的な解答を見出すことは容易ではない。

このほか、現代中国人の死生観に見られる重大な変化とは、死の結果に対する関心から生きていく過程の関心への転化であり、人々はますます生活の質と生命の質を重視するようになった。これらの変化が、西洋文化の影響を受け、また都市生活が興起した結果を反映したものであることは否めない。現実を重視し、生活を享受し、効率を追求するなどといった西洋文化の観念が次第に中国人に受容されたのである。都市生活によって生活のリズムは加速し、人と人の接触も増え、ファッション、嗜好、交易、情報などはまたたく間に大きく変わり、人々はもはや「永遠」や「永久」という言葉を信じなくなり、今この瞬間や過程自体をなおのこと重要視するようになった。そして死に関して理性的に思考し探究する学説が出現しはじめ、死を人間の生の主題であると考えたり、人間の生存とは死に向かう存在であると捉えたりした。ある人たちは自主的に死を「コントロール」したり「選択」したりする試みをし、信念のために生を放棄し、あるいは死を選択した（これは以前に貧困や精神的な抑圧などによる自殺とは異なる）。死は次第に真剣に向き合い思考すべき問題だとみなされるようになり、死は人類や生命の価値などさらに抽象的な概念と結びつけられるようになった。

しかし、変わらないものもある。それは中国人の死後の落ち着き先についての考え方である。中国人が死に直面したときに考えるのは、死後に自分の魂がどこに安住するのかということではなく、生者に対する義務である。もしこれらの義務（たとえば若い両親の未成年の子供に対する義務）が遂行できなければ、「死んでも死にきれない」思いを深くし、「死に場所を得られない」ことになるのである。

三

生は人がこの世に入る入口で、死は人がこの世に別れを告げる出口である。中国の伝統文化はどのように生

死の問題に対処したのであるのか？ 総体的に言うと、中国の伝統文化はこれらの出入口に関心を示さず、出入口の間の過程すなわち人生に関心を寄せた。これは中国人の実用的かつ理性的な特徴になつており、人倫関係に安んずる一般の人々を基本的に満足させるものであった。

一般的に言うと、中国人の死生観は「生」によつて死を解釈し、死を直視せず、「死」は「生」の中に組み込まれた。このような推理法には、経験重視と現世重視という中国人の思考方法の重要な特徴が反映されている。まさに西洋人が観察したとおり、中国人には全般的に、事実自体によつて事実を解釈し、その中の道理は追究しないという習性がある。言い換えると、表面的な事実や事件の経験的側面のみを見て、事実や事件の背後にある原因をあまり深く考えようとせず、推理する際にも知識や真相自体のロジックを洞察しにくいのである。たとえば、中国人の料理人に「パンになぜ塩を入れないのですか？」と聞くと、「私たちはパンに塩を入れないのです」という説明をされるだけであろう。直観と経験化の思考方法により、中国人の職業階層の間では客観化と体系化がなされた職業技能は蓄積されなかつた。それゆえ、職業の専門化のレベルも高くないのである。

中国式の社会主義イデオロギーは、中国の伝統的な死生観を否定した。新たな死生観の主な内容は次のとおりである。(一) 政治傾向で生死の価値を判断し、政治的な理想を実現するためには、死は生よりも一層重要である。(二) 生も死も自分や自分の家族のためではなく、革命や国家のためのものである。(三) 献身の度合いに応じて職業の高低が分けられる。軍人、警察、鉦工業従事者、石油業従事者、地質業従事者などは比較的高く評価され、農民、教師、幹部、医師などは比較的低い位置づけられた。

農業中心の時代において、職業階層は職業技能の蓄積と伝承によつて表現されるだけでなく、職業集団が有する独自の生活様式によつてもうかがい知られる。これらの職業技能と生活様式などはみな伝統社会の存続

を支える礎石となった。都市文明の出現と経済の急速な発展にともない、特に行政権力が強力に浸透することによって、職業階層間の歴史的伝統にも断裂が生じ、従来の死生観にも変化が生じた。

中国の伝統文化について、馮友蘭氏はかつて「抽象的に批判し、具体的に継承する」必要性を説いた。すなわち、これはマルクス主義の一般原理を運用して歴史を整理する必要性を言っているのであり、総体的に言えば、方法論の面では批判を加えるが、具体的な理論体系と観点においては継承する必要性を認めているのである。残念なことに、この卓見はまだ十分に生かされておらず、現時点では、政府が正統とする言論と実際の行為の間には「抽象的に継承し、具体的に批判している（甚だしくは破壊したり粉碎したりすることさえある）」という構造が形成されてしまった。こうして、伝統文化を継承するとは字面だけのお役所的なスローガンにすぎないものとなり、伝統文化を伝える建築、廟、町並み、陵墓などはほとんど壊されてなくなってしまうのである。伝統文化を伝えるものがなくして、どうして文化が残りえようか？

現代中国では、依然として職業によって死生観に差異が見られる。大まかに言うと、指導的幹部（特に下級幹部）には顕著な有神論の傾向が見られ、おみくじ、八卦、占い、観相などは非常に流行している。一般市民（労働者、農民、職員を含む）はよりどころがないため、死に対してはなすすべがなく、悲観主義が比較的顕著である。一部の知識人はわりあい悠揚としており、彼らの中には、人生の中に自己を位置づけるべきだという人もいる。

現在、個人の職業選択は相対的に自由となり、死の問題に対する考え方も多元化の傾向に向かい、職業の違いによるグループもそれぞれの生活様式を形成したため、彼らの死に対する見方も明らかに異なっている。理論上では（事実上ではまだそうなっていないが）、普通の中国人の日常の死生観を決定すると思われる職業グループとは、教師、医療関係者、社会的な著名人などである。

普通の中国人にとって、「病なくして臨終を迎える」のが最も理想的な死に方である。これは天寿をまっとし、十分長生きして、最後は体力の衰えによって死ぬことである。このような死に方をしたとき、家族の者はとても喜ばしい気持ちで葬式を出す。この葬式は「白喜事」と呼ばれ、結婚が「紅喜事」と呼ばれるのに対応し、このうえなく自然な出来事で、人生の中のすばらしい出来事だと考えられる。過去においては、これを実現するのは非常に難しいことであつた。というのも、たとえば豊かな暮らし向き、子供たちを授かること、子供たちが親孝行であること、老後に心配がないことなど、多くの条件を備えねばならなかつたからである。

中国人が最も耐え難いのが、原因不明の死である「屈死」と不慮の災禍による「横死」である。たとえば、入院したときにはたいした病気ではなかつたのに、数日もたたないうちに死んでしまい、病院の説明も納得のいくものではない場合、このような死は屈死とみなされる。「屈死」あるいは「横死」をした人は自己の人生をまっとうできなかつただけではなく、この世に残された人々を加護することも難しくなる。「中国人の悪口で風変わりなのは、人をなじるときに、適切な形で相手に存在する欠点をあげつらうことを考えずに、相手の最も卑しい出身にまでさかのぼって、祖先をのしるという点である」⁵。このほか、自殺も多くの中国人にとって一種の「屈死」だと考えられている。自殺者は必ず悪い刺激を受けたはずで、最終的に自殺に追い込まれるような要因が存在するに違いないとし、自殺者の遺族は自殺者の所属した職場や配偶者を責めるのが一般的である。中国人の慣例では、自殺者は祖先の墓に入ることができず、供養も受けられない。

屈死した人の大部分はよその土地から来た人で、横死者の大部分は軍人、商人であつた。要するに、外地で苦勞し、利益を追求していた人たちが最も不慮の災禍に見舞われやすかつたのである。それゆえ、古代の中国人は軍人と商人になることを望まなかつた。これに対して、農民と読書人の活動は高く評価され、役人は前者

と後者の類型の間に位置した。⁶

注意すべきは、都市において、マスメディアの発達により、死に関する思考と死生観の面にも職業階層や地域の相違を超えた同質化の傾向があらわれ、現代中国人の死生観における職業的な差異がますます希薄になったことである。しかし都市と農村の差異は、死生観において依然として重要な影響力を発揮している。たとえば、農村では天命に従うという生活態度が多く見受けられ、手厚い埋葬や、土葬に際しての儀礼が盛んに行われ、死を恐れる意識も大変に強い。

市場は中国人の死生観に対して二重の働きかけをした。第一に、市場は人々の死に対する任意性と不安の意識を強めた。市場は瞬間的に大きく変貌し、常に競争にさらされており、交通や生産などの面で突発的な事態が絶えず発生しているため、死に対する感覚が麻痺してしまった。第二に、市場は製品、サービス、技術などを通して、全世界の人を結びつけ、一人の死は公共の事件へと変化し、公共の討論は人々を深い思索へと導かない、「我々」という意識の生長を促した。生の欲望と生命の質を強調することは、人生の中ですることとできることの矛盾を際立たせ、死はもはや自然な出来事だとみなされなくなった。総括して言えば、市場が導く経済的個人主義と、社会的要求に基づいて人類の生存を守る「生命共同体」を協調させること、これが非常に現実的で差し迫った問題だということになるであろう。

〔註〕

- 1 現代社会において、職業階層は最も基本的な社会的分類である。職種によって、収入、ステータス、教育、権力などに違いがある。職業階層の基礎の上に、社会的資源の占有状況などの指標を加味して、さらに社会階層を分類す

ることができる。現在、中国で比較的良好に見かける分類法は、社会階層を次の十種に分類するものである。①国家や社会の管理者階層（行政幹部）、②経営者階層（企業幹部）、③民間企業家階層、④専門技術者階層（知識人）、⑤事務職員階層（職員）、⑥自営商工業者階層、⑦商業サービス業の従業員階層（商業労働者）、⑧産業労働者、⑨農業労働者階層（農民）、⑩都市と農村の無職者・失業者・半失業者階層。

2 ある意味では、中国は二十世紀初期に打ち出された近代化の使命を受け継いだと言える。しかしこの度の近代化のプロセスには、経済を主体とし政治を二の次とする「奇形の近代化」という特徴が依然として見受けられる。

3 この点は北方よりも南方において顕著である。しかし近年、南方で経済が発展したことにより、南方の習俗と觀念も全国広範囲にわたり伝播した。

4 アメリカ人のアサー・スミス著『中国人の徳行』（張夢陽など訳、新世界出版社、二〇〇五年）四十九頁を参照。

5 アメリカ人のアサー・スミス著『中国人の徳行』（張夢陽など訳、新世界出版社、二〇〇五年）一三五頁を参照。

6 このような職業の好みを、文を重んじ武を軽んずるといふ中国人の昔からの風潮で理解する人もいる。中国では隋代に文人を重用する科挙制度を創設した。科挙制度によって、身分の低い人や貧しい人も試験に合格して官吏となる機会を得られた。世襲制度に比べて、進歩的で公正な人材登用法である。しかし科挙の試験科目は非常にかたよっており、儒学と文学を受験すればいいだけなので、政治、経済、軍事、科学などの知識がまったく欠けている人たちも数多く合格し任官した。それゆえ、中国の官界では実学を軽視する風潮が醸成された。

（翻訳 遠藤祐介）